

# 標準撮影法

## ・ 接遇 受診者対応と環境整備

### 1. 良い接遇の必要性

良いマンモグラムを得るためには、乳房の可動性を良好に保つ必要がある。それには受診者がリラックスできる環境づくりとともに、撮影時に全身の力を抜き、微妙な体位調整に応じてもらうなど受診者の協力を得ることが必要不可欠である。検査担当者の知識と技術が十分でも、受診者の協力がなければ良好なマンモグラムを撮ることが困難であることを理解し、適切なコミュニケーションをとる必要がある。良好なコミュニケーションを行うには、節度ある態度、清潔な身なりは基本的な要素である。これらを満たしたうえで、どのような検査内容かを説明し、信頼と協力を得るように努力する。

#### 1) インフォームドコンセント（説明と同意）

現在は、インフォームド・コンセントに関する受診者の意識が高まってきている。従来のTVや新聞などで報道される、その場限りの情報配信から、インターネット等に代表される継続的な情報配信構造に変化し、必要な情報がいつでも閲覧できるようになった。そして、医療の質に関する話題も取り上げられる機会が多くなり、「診ていただいている」という意識は薄れ、より納得のできる診療を求め、受診する施設を選択する時代になった。このことが、医療機関に競争原理を導入するきっかけにもなり、社会や所属施設が、医療従事者にサービス業としての振る舞いを求めるようになった。検査を担当する我々も当然ながら、受診者に対するインフォームド・コンセントを徹底し、良い接遇を心がけなければならない状況にある。

受診者はほとんどが女性で、上半身裸あるいはそれに近い状態となり、乳房に直接手で触れられ、さらに、圧迫による痛みを受ける。そのような特殊な検査内容であるため特別な配慮が必要である。

## 2. マンモグラフィに対する不安

マンモグラフィを撮影する際、受診者の緊張とポジショニングの良否は密接な関係にある。不安を持ったまま検査を受けた場合は、緊張から筋肉が強張り、適正なポジショニングを行うことが困難となる。受診者の不安を取り除き、安心して検査を受けられるようにすることは、診断価値の高い画像を得る意味でも必要なことである。そのため、マンモグラフィ検査時は、受診者の不安を取り除くことが、会話の主たる目的となる。

受診者の持つ不安には、病気や検査、検査担当者に対する不安がある。すべての不安を検査時の説明だけで取り除くことは難しいが、検査について理解を得ようとする努力は検査担当者が信頼を得るうえで最も重要なことである。そのため、検査に関する事前説明は大変重要な意味を持つ。

以下に、前述の3つの不安を解消するための工夫を記載する。

### 1) 病気に対する不安の解消

医師を中心としたスタッフの意思統一がなされ、チーム医療としてのコミュニケーションと情報の共有化を図ることが大切である。各科・各部署で説明される内容に相違があったのでは、受診者は安心して診療を受けられず、その施設に不安感を持ってしまう。そのため、検査を担当するものは、乳腺疾患に関する知識や超音波などの他検査についての知識も持ち、チーム医療に参画できるようにすべきである。

### 2) 検査に対する不安の解消

検査に関する説明は、検査担当者自身が受診者に直接説明し、十分に理解されてから検査を行うべきである。医師の指示で検査に訪れても、診察室ではその検査内容についての説明がなく、受診者は、「その検査で何がわかるのか」、「どのような手技で行われるのか」を理解していないことが多い。診察室で説明を受けていたとしても、その内容が十分でない場合もある。

事前説明では、検査の目的、検査の手技、X線被ばくの3つが重要事項となる。

検査手技について、事前に概要を把握できるようポスターを掲示したり、パンフレットを配布すれば、検査・診察の待ち時間の有効利用にもなる。さらにビデオなどが見られる設備があるとよりよい。しかし、これらの手段はあくまでも口頭説明を補助するものである。

### 3) 検査担当者に対する不安の解消

検査担当者は、根拠に基づいた検査技術を習得することが重要である。事前説明によって検査に対する不安を取り除いても、検査担当者が「この人で大丈夫？」という思いを抱かせてしまっては元も子もない。そのような不安を持たせてしまう理由として以下の2つが考えられる。接遇に問題がある場合と、担当する検査担当者自身がなんらかの不安を持ったまま検査に臨んでいる場合である。接遇に問題がある場合に受診者が嫌悪感を持つのは当然として、検査担当者のちょっとした不安が受診者の信頼感を損ねるのは残念なことである。

検査担当者の持つ不安は、検査技術に関する不安が多い。経験不足が要因のひとつであり、対策として、経験を重ねることがあげられるが、解剖や病理などの知識に裏付けされた、根拠に基づいた技術の修得は、経験不足を補い、検査担当者の不安解消にも役立つ。経験に頼った技術は安全性、応用性に乏しく、なによりも技術の伝承に役立たない。知識に基づいた技術を修得することが、自信につながり、自信は良い接遇につながるので、解剖や乳腺病理に関する知識も身につけるとよい。

### 3. 撮影時の対応

第一印象が大切である。第一印象が良ければ、その後の説明や撮影がスムーズに進められることが多い。最初に悪い印象を与えてしまうと、その後の検査時に良好な関係を築くことが難しくなり、検査終了時まで双方が戸惑うことになりかねない。それにより、乳房圧迫時の痛みも増加し、双方にとって不利益な事態につながることもある。説明をする際は、小さな声で話す自信がなさそうに感じ、不安感を抱かせてしまうことがある。明確でありながら、やさしい口調でゆっくり話すよう心がけるとよい。接遇は検査技術のひとつであり、検査手技と同様に重要で、検査担当者の技量の差が生じるところでもある。以下に記す検査前後の重要事項を参考されたい。

#### (1) 検査前の準備

白衣が清潔であること。

腕時計、胸ポケットのペン、指輪などを外す。

名札は、受診者に触れにくく、目に入りやすい場所に着ける。

検査担当者の髪が長い場合は束ねる。

#### (2) 検査室への呼び込み

丁寧な対応を心がける。

「検査を担当する診療放射線技師の 〇〇 です」などと名乗る。

名前は必ずフルネームで確認する（本人に名乗っていただくのも確認方法としては効果的）。

#### (3) 検査前の対応

以下2点については、できれば受診者の目にとまるように行うと効果がある。

手指を洗浄または消毒する。白い綿手袋を使用する方法もあるが、この場合は必ず受診者ごとに新しいものに替えたほうがよい。

消毒用ガーゼ等で受診者が触れる乳房支持器、圧迫板、フェイスガードなどを清拭し、清潔を保つ。

#### (4) 検査前の説明

事前に問診あるいは説明したほうがよいと考えられる項目を以下に示す。また、下記以外でも、しこりや分泌物、気になる自覚症状について尋ねることが必要な場合もある。

##### 過去の検査歴の聴取

過去にマンモグラフィを受けたことがあるかを確認する。検査歴がある場合はそのときの印象を尋ね、既往のある場合は、後の説明を多少簡潔に済ませてもよい。

##### X線撮影であり、被ばくを伴うことの説明

マンモグラフィでの放射線被ばくの影響はまず問題がないことも付け加える。

##### 撮影する方向と枚数

##### 圧迫手技の必要性

人によっては痛みの程度が異なるが、診断価値の高い画像を得るためと被ばく線量を少なくするために、できるかぎりの協力をお願いする。ただし、我慢できないときは危険防止のためにも遠慮なく申し出てよいことを伝える。圧迫手技についての説明は特に重要で、詳しく丁寧に説明するよう心がける。

##### 緊張を解くこと

緊張を解くと大胸筋が柔軟になり、それに伴い乳房も軟化するため、圧迫時の痛みが和らぐことを説明する。

##### 撮影のため乳房に直接触れること



図1 着衣での撮影  
前開きのガウンであれば撮影は可能である。

#### (5) 検査中の対応

ポジショニングの最中は声をかけながら，また受診者の様子を観察しながら検査を進める。

背後からのアプローチや声かけは受診者の不安につながる場合があるので，行わないよう心がける。

X線管の回転・上下動（特に電動式）を行うときは，事前に説明する。

X線プロテクタを受診者が希望する場合は，放射線被ばくによる影響がほぼないことを説明したうえで，希望に添うよう対応する。

#### (6) 検査終了後の対応

できれば受診者の協力に感謝の意を伝える。

再度，検査についての質問，疑問がないかを尋ねる。

最初と最後は印象に残りやすいので特に注意をはらうこと。フィルムや伝票を渡す際も同様で，印象が良いよう対応する。

### ポイント：検査衣について

乳房を挟んで撮影しなければならないが，すべての行為を上半身裸のままで行うことは望ましくない。受診者の羞恥心に配慮し，ポジショニングをする際も，検査衣は着用したままで行うようにする。前開きの検査衣等を用意し，検側だけ開けて検査を行う。検査衣がアーチファクトの原因となることがあるが，撮影直前に照射野ランプで確認を行えばよい。特に広範囲の切除術を受けている受診者の場合は，十分な配慮が必要である。マンモグラフィ用に作成された検査衣も市販されているが，通常の前開きの検査衣でも問題なく利用できる（図1）。

## 4 . 撮影環境・設備

他の検査室でも同様だが、部屋の広さや豪華さよりも、よく整理整頓された清潔感の感じられる環境を保つことが大切である。そのうえで、落ち着いた感じられる検査室にすることが望ましく、壁紙の色を工夫したり、絵画を掛けたり、BGMを流せるようにするとよい。

また、薄着になるため部屋を暖かくしたほうがよいが、暖かすぎる部屋は気分が悪くなりやすいので、随時受診者に訊ねるようにする。

マンモグラフィ撮影に必要な機器以外で準備しておきたいものに、消毒用ガーゼやアルコールガーゼ、髪を束ねるゴムや使い捨てのキャップ、受診者自身が使用できる汗拭き用のウェットティッシュなどがある。受診者が直接肌に触れる部分（乳房支持器、フェイスガード、圧迫板など）は、受診者ごとに清拭する。接触部分についた脂質、汗などを除菌用タオルなどで清拭することは細菌の増殖を防止し、受診者が安心して検査を受けられる清潔な環境を保つことと同時にポジショニングを安定させるためにも必要なことである。

### 1) 施 設

建物の新旧にかかわらず入り口は明るくきれいにする。

受付は目立つように表示し、対応は迅速にする。

案内は統一された表示とし、動線は誰にでもわかりやすいよう工夫する。

### 2) 検査待ち合い

待ち時間が長くないように、予約制などを考慮する。

待ち時間が把握できるよう声かけや時間表示をする。

待合室はできるだけゆったりとした空間を作る。

花や絵画を装飾したり、音楽を流し、落ち着いた雰囲気作りを心がける。

マンモグラフィや乳癌に関するポスターやパンフレットなどを掲示し、ビデオテープを流すとよい。

### 3) 更 衣 室

内側から掛けられる鍵を設置し、不安感を抱かれないような広さとする。

身だしなみを直せるように鏡、ティッシュペーパー、ゴミ箱などを設置する。

荷物が置ける棚と上着を掛けられるフックを用意する。

更衣室近くに洗面台を設置する。

### 4) 撮 影 室

撮影室内は常に整理整頓する。

装置まわりはホコリがたまりやすいので清掃を心がける。

圧迫板、乳房支持器、フェイスガードなどの受診者が直接接触する部分は、必ず受診者ごとに清拭を行う。

乳頭分泌液などで感染を生じる可能性がある場合に備え、機器を消毒できるよう消毒液やアルコールガーゼを用意する。

髪を束ねるためのゴム、髪留め、使い捨てのキャップなどを用意する。

快適な環境を作り心を心がける。壁面は暖色系にし、間接照明を設備できれば理想的である。